

トウハシリ考——沖繩の家の神についての一試論

赤嶺政信

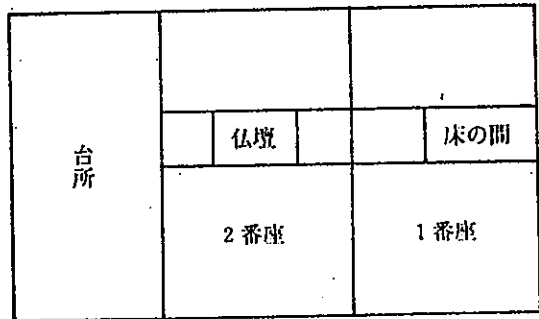
一 はじめに

沖繩の家祭祀において祭祀の対象になるものとして、仏壇で祀られる祖霊、火所で祀られる火の神、床の間で祀られる床の神、それにトウハシリなどがある。その中で特に注目されてきたのは火の神である。火の神についての論稿は多く、火の神の出自、火の神の更新、中国の竈神信仰との関連、産育・婚姻儀礼との関わり、火の神の移灰、地域的変差の問題など、様々な角度から論じられてきた。祖霊信仰についても、一定の研究の蓄積がなされてきている。床の神については、沖繩本島のいくつかの地域で、かつての穴屋構造の家屋には床の間はなく、したがって床の神は祀っていなかったという伝承が聞かれ、一般の家で祀るようになるのは比較的近年のことと思われる。ただし、八重山地域の床の間で祀られる神については一応別に考えたい。一方、トウハシリについては、これまで断片的な資料報告はあったが、家の神として体系的に論じられることはなかった。本稿では、トウハシリに焦点を絞って論じたい。

二 トウハシリをめぐる習俗

我部祖河文書（名護市我部祖河の旧家の家蔵文書）の中に、明治初葉に作成されたと考えられる「毎年諸祭り記」がある。家祭祀執行のための覚書として所蔵家の家長によって記されたもので、その中に戸はすりとという語が登場する。正月元旦、正月初歳日、正月十五日、田植付初、田植首尾、十月種子取時入などの家祭祀の際に、火の神、仏壇、床などと共に戸はすりが祭祀の対象になっている。また、この「毎年諸祭り記」の現代語訳とも呼べる「家内記録」が第二次大戦後に関係者によって作成されているが、その中では、戸はすりは十柱と書き改められている。

この史料を紹介し分析した小川徹氏によると、トハシリは、今日の民間解釈では十方すなわち十柱の神を拝む場所とされているが、それは附会的な説明で、トハシリとは家の出入口のことだということ（小川、一九七七、52頁の「文献目録」参照。以下同じ）。しかし、トハシリをめぐる各地域の習俗を調べていくと、トハシリの性格は家の出入口としてのみ理解できるほど単純ではないように思える。小川氏の見解に関連して言えば、トハシリを家の出入口として解釈した場



沖縄の民家の間取りの基本型

きるとしても、何故正月とかその他の年中儀礼で拜む必要があるの
 だらうか。それについての小川氏の見解は必ずしも明確でない。
 トウハシリという語は、沖縄本島およびそのいくつかの周辺離島
 で使用されており、地域により、あるいは同じ地域でも伝承者によ
 って、トウハシルあるいはトウハシラとも発音される。そのこと
 は、トウハシリの語源について考察する際一つの問題点になると思
 うが、ここではふれないことにする。地域によりあるいは同じ地域
 でも家によって、トウハシリの香炉があることもあればないことも

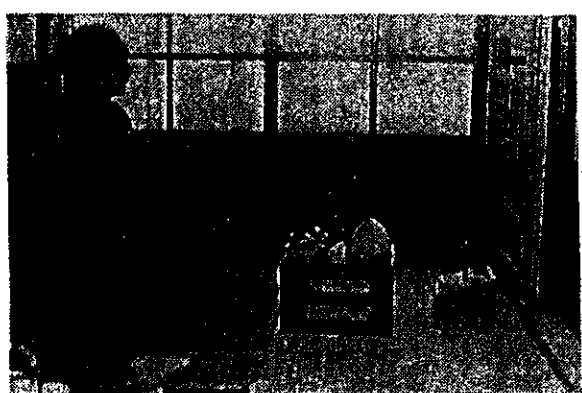
合、それはたとえ
 ば盆の精霊を迎え
 たり送ったりする
 単なる儀礼執行の
 場なのか、それと
 も、家の出入口の
 神とも呼ぶべきも
 のの存在を想定す
 べきなのかという
 問題がある。とい
 うのは、もし後者
 であるとすれば、
 小川氏の言うよう
 に旅立ちの祈願の
 時拜むのは納得で

ある。西原町棚原では、かつて各家とも一番座の表入口にトウパシ
 ルの香炉があったが、現在はいくつかの旧家を除いて置かれなくな
 っているといひ(『沖縄民俗』二二二)、南風原町喜屋武においても、か
 つてはほとんどの家の一番座あるいは二番座の出入口にトウハシル
 の香炉があったが、ユタにトウハシルは拝まなくてもいい、あるいは
 トウハシルの代わりに床の神を拜むべきだと指導されたりして、
 トウハシルの香炉を置かない家が多くなっている。この二部落の事
 例だけでもって断定することはできないが、おそらく現在はトウハ
 シリの香炉のないその他の地域においても、かつてはトウハシリの
 香炉があったものと推測される。次に、より具体的な事例に基づき
 トウハシリの性格について考えていきたい。

玉城村船越では、仏壇のある二番座の出入口のことをトウハシル
 という。トウハシルの香炉はない。盆のウークイ(お送り)儀礼のと
 き、仏壇での押みが済んでからトウハシルに台を置いて仏壇の供物
 と香炉をその台の上に移し、香炉に線香を立てて外に向かつて拜
 む。盆以外にトウハシルで儀礼を行うのは、マブイギミなど御願対
 象が屋外にあるときで、一般の年中儀礼でトウハシルが祭場になる
 ことはない。南風原町喜屋武のある家(トウハシルの香炉はない)で
 は、クチグトウが入っている(クチグトウとは口事、他人が家族の悪
 口を言うこと。クチグトウが入るとその家族に災いの生じる恐れがある)と
 いうユタのハンジが出たら、トウハシル(二番座の出入口)でそのク
 チグトウを追い出す儀礼をするという。西原町棚原では、八月十一
 日のヨーカビーの時、祀る者のない迷い霊や悪霊をなだめて送り返

すために、トウパシルにヨーカビージュシー(雑炊)を供えると
 いう(『沖縄民俗』二二二)。

以上あげた事例から言えることは、トウハシリは家の出入口のこ
 とを意味し、それ故にある種の儀礼の行われる場所になっていると
 いうことである。トウハシリに特定の神が祀られているわけではな
 い。



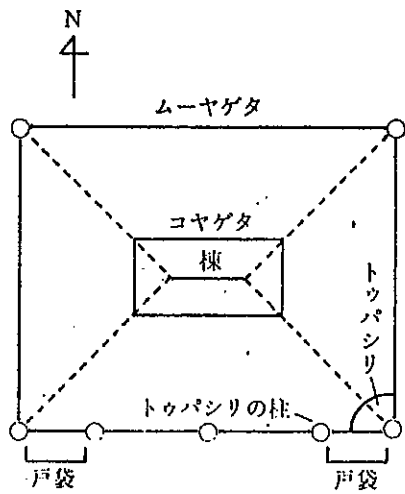
トウパシリでの祭祀(久高島)

次に久高島の事例をみてみよう。久高島では、南向きの家の一番
 座の南東隅(現地の方
 位観で言えばウマヌファ
 11午の方向)の棚に置
 かれていた香炉のこと
 をトウパシリあるいは
 トウパシリの香炉と称
 している。トウパシリ
 という語は、その香炉
 が置かれていた空間を
 示すものなのか、ある
 いは香炉そのものに對
 する名称なのか、人々
 自身明確には意識して
 いない。トウパシリの
 ことを、トウパシルあ
 るいはトウパシラとい

う人もいる。儀礼の際は、棚から降ろされ線香を立てその香炉に向
 かって祈願がなされる。トウパシリだけが祭祀の対象となる儀礼は
 ないが、通過儀礼や年中儀礼などほとんどすべての家祭祀におい
 て、火の神および床の神とともに拜まれる。拜みの順序は、火の神
 ↓トウパシリ↓床の神である。

さて、久高のトウパシリについて一般に考えられているのは、ト
 ウパシリには、その家の女性がイザイホウの時に勧請したタマガエ
 ーヌウプティシジを祀っているということである。イザイホウと
 は、十二年に一度の年年に行われる村落祭祀で、それを契機に三十
 〇四十一歳までの女性が村落祭祀組織に加入するいわゆるイニシエ
 ーション儀礼である。そのイザイホウの際新加入者たちは、島に七
 あるいは九つあるとされる御嶽の神(タマガエーヌウプティシジはその
 総称)を、各自の家のトウパシリに勧請し祀るのである。トウパシ
 リでの祭祀は、そのタマガエーヌウプティシジに対して行っている
 と人々は説明する。

では、トウパシリにて祀られるのは、タマガエーヌウプティシジ
 だけであろうか。トウパシリの香炉は、実はイザイホウを契機に設
 置されるのではなく、家を創設した段階で設置される。すなわち、
 次三男が分家し、その家の主婦がまだ村落の祭祀組織に加入してい
 ない(イザイホウを経験してない)段階でも、その家にはトウパシ
 リの香炉があり、家祭祀において祭祀の対象になっているのである。
 したがって、タマガエーヌウプティシジとは異なる別の神がトウパ
 シリにて祀られていると考えなければならぬはずである。久高で



久高島のトウバシリと「トウバシリの柱」
は、トウバシリが家の出入口として説明され、入口と出口とほとんどなく、したがって、トウバシリでの祭祀が外界の諸神への進拝として

意識されることもない。しかし、タマガエーヌウブテイシジを勧請する以前のトウバシリでの祭祀が何を対象になされているかについての人々の説明は曖昧模糊としている。その点はさておくとして、トウバシリで何らかの神が祀られているという点だけをここでは確認しておく。

南風原町喜屋武のトウハシルについては先にもふれたが、ある家では、正月やその他の折目（盆と彼岸は除く）の時に、火の神や仏壇とともにトウハシルを拜んだとい、それはトウハシルヌウカミガナシに對する祈願であるという。トウハシルには明らかにある種の神が祀られていたと考えてよい。別のある話者は、トウハシルの神は台風などの時に家屋を守ってくれる神であると語っている。さら

に、中城村伊集でも、一番座の戸口をトウハシルと称し、そこにはトウハシルヌカミのための香炉が置かれていて、毎月の朔日、十五日には火の神の次に拜まれるという（『神純民俗』二三）。

このように、トウハシリにある種の神が祀られていることは、いくつかの事例によって例証されるのであり、トウハシリは、本来単なる家の出入口ではなかったと思われる。そのことは、たとえば一番座にトウハシルの香炉のある南風原町喜屋武のある家では、盆の精霊送りの儀礼をする二番座の出入口のことはトウハシルとは称していないこと、また、同じく喜屋武の事例で、二番座の出入口にトウハシルの香炉があったが、二番座の出入口で行う盆の精霊送りの時にトウハシルの香炉を拜むことはなかったということによっても傍証されるであろう。

トウハシリにて神が祀られているとすれば、それは如何なる性格の神であろうか。次にその点について考察を進めていきたい。

三 トウハシリと柱

まず久高島の建築儀礼からみてみよう。久高島の建築儀礼は、①地ならし、②手斧立て、③柱立て、④床の祝い、⑤シユビの祝い、の順序で行われる。①は土地神から屋敷をもらう御願、②は起工式、③は柱を立て始める時に行う儀礼、④は床の間を作った時に行われる儀礼、⑤は落成式である。

この一連の建築儀礼の中で特に柱立ての儀礼に注目したい。柱立ての儀礼において、「トウバシリの柱」と呼ばれる柱が特別の役割を果たしていることは、トウバシリの性格を考える上で極めて重要

である。「トウバシリの柱」とは、右図に示したように、トウバシリの香炉のある方向に立つ柱のことを指し、柱立ての儀礼はこの柱を立てて祈願するのである。改築の時は、火の神、トウバシリ（「トウバシリの柱」が立てられ、その前にて）、床の神の三カ所にて祈願を行うが、新築の時はトウバシリだけが拜まれる。新築の際の新家のトウバシリの香炉は、柱立ての儀礼に使用されるため、それに間に合わせて準備しなければならぬという。以上のことからして、トウバシリが柱と関係していることが理解されよう。実際、ある話者がはからずも語ってくれたように、一番座の隅の棚に置かれていたトウバシリの香炉が儀礼の際棚から降ろされると、それはちやうど「トウバシリの柱」の前に位置することになる。トウバシリでの祭祀はその柱に対してなされているのではないか、というのが筆者の見解である。「トウバシリの柱」が意味ある柱であることは、手斧立て儀礼の時、かつては「トウバシリの柱」に使用する材木を横たえそれに対して祈願をしたという点にも窺える。

トウハシリと柱の関係は、次の事例によっても示唆される。南風原町喜屋武のある家では、一番座の南東隅に立つ柱（この家には縁があり、縁の内側に立つ柱）の前にトウハシルの香炉があり、トウハシルの拝みはこの柱に向かって行ったという。さらに、次に述べる佐敷町小谷の事例も興味深い。

小谷では、仏壇のある二番座の出入口のことをトウハシルと称し、トウハシルと相對する庭側の空間をナカジンと呼んでいる。トウハシルの香炉があるが、儀礼の時以外は邪魔にならない場所に片

づけておく。ほとんどの年中儀礼には、火の神、仏壇とともにトウハシルも拜む。さて注目したいのは、トウハシルでの拜みの時、「ナカジンヌカミガナシ、今日は○○の行事です。○○を供えますのでどうぞ受け取って下さい」という意味の唱詞を唱えるということである。ナカジンヌカミガナシというのは、ナカジンの神の意であり、トウハシルでの儀礼で祈願の対象になっているのはナカジンの神なのである。私の会った話者は、ナカジンとトウハシルは同じだと明言している。

ナカジンとトウハシリの同一性は、久米島仲里村比屋定で、屋敷の拝みの時、「祈願はまず北の隅から東、南、西、門、トハシラ（家の真正面）という順で行う」（傍点引用者、『神純民俗』一四）という報告によっても示唆される。また、ナカジン拜み（後述）のない久高のある神人は、久高のトウバシリでの拝みは本島のナカジン拜みと同じであると語っている。

ではナカジンとは何であろうか。小谷もそうであるが、その他の多くの地域においても、屋敷の御願の時、ナカジン拜みと称して二番座の前の庭から家の中に向かって拜む儀礼がある。ナカジンは、その儀礼の行われる場所をさすものとして解釈されることもあるが、そうではなく、本来は家の中柱を意味していたことは次の点よりほぼ確実である。十二月のムーチー（鬼燈）の日に、子供たちがムーチー小屋グアアと呼ばれる小屋を作り後でそれを焼くという行事が各地にみられるが、円形の小屋の中心に立つ中柱のことを佐敷町ではナカジンと称している。ナカジンを中柱と解すれば、「屋敷神

